

| 授業科目名                        | 担当教員名     | 授業実施日    | ※     |
|------------------------------|-----------|----------|-------|
| 学問の面白さを知る<br>(中世ヨーロッパの修道院文化) |           | 5月16日(火) |       |
| 学生番号                         | 学部・学科     | 学年       | 氏名    |
| 09071036-3                   | 農学部・生物環境科 | 1年       | 村瀬 泰久 |

日本の寺院には、古くから伝えられてきた経典、または書物が存在する  
ように、やはり西洋の教会・修道院にも様々な聖書などが残っ  
ていることは納得していた。

ここで一つ気になることがあるのだが、西洋においてはルネサンス期が  
訪れるまでは古代ギリシャやローマの文化はキリスト教会におよ  
び止められていたはず。その時期にどのようにして修道院の  
人々は写本作業を行うことができたのだろうか。また  
写本の際、その筆の引き方やレイアウトが個人で異なるのでは  
なく院ごとに異なるということがとても興味深かった。そこから  
書体学という学問にまで発展していったこともまた驚かされた。けれ  
どもその様に、抗率した方が確かに見栄えはいい。西洋の古典  
書物というのは、東洋に比べ明らかに複雑で凝って作っており、一種  
の芸術のように入る。「中世ヨーロッパの写本文化」(鈴木哲也著 リベール出版)  
によると、多くの情報を載せ、より読書に印象強くすることでの思想の  
統一へとつながるらしく、再度ヨーロッパの文化はキリスト教に根付  
いていることを思った。また中国の様に一冊一冊の竹に文字を書か  
ずに一枚の大きな紙に書く文化であったことから、修道院ごとに  
まとめられた一つの文化として成り立ったのだと感じた。